2019–
2020

02

AKITA UNIVERSITY OF ART

AKITA UNIVERSITY OF ART

プロジェクトをつくり、
社会と繋がる美術大学へ

秋田公立美術大学はキャリアに繋がる基礎として、技術、歴史、伝統を重視しています。そして新しい美大として、新しい美術・デザイン・ものづくりによる社会への還元を探り、教育や研究の実践を通じて、プロジェクトをつくり、社会と繋がる機会と場づくりを進めています。

2018 年 4 月には、大学と地域の社会連携を担ってきた社会貢献センターを NPO 法人アーツセンターあきたとして改組。

多彩な教授陣が展開する数々のプロジェクトや研究成果といった美大のリソースと地域を繋げ、アートとデザインを用いた新たなプロジェクトに取り組んでいます。大学に集積された「知」を生かし、企業や行政との産学官連携事業、展覧会、教育事業などとして地域で展開しています。

ヴェネチア・ビエンナーレ日本館展示に服部浩之准教授と石倉敏明准教授！

イタリアの島都市ヴェネチアで120年の歴史を刻む芸術の祭典「ヴェネチア・ビエンナーレ」。2019年5月から11月にかけて開催される「第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展」の日本館キュレーターに、秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科および美術学部アーツ＆ルーツ専攻の服部浩之准教授が選出されました。同専攻の石倉敏明准教授も作家の一人として参加します。

美術界の注目を集める国際展

ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展はヴェネチア市を会場に２年に１度開催されます。美術展の他に建築展、音楽祭、映画祭、演劇祭などが独立部門として開催され、国別参加方式を採る美術展は世界の現代美術の動向を俯瞰できる国際展として美術界の注目を集めてきました。日本館では日本代表作家として、アーティスト・下道基行氏、作曲家・安野太郎氏、建築家・能作文徳氏、そして人類学者・石倉敏明准教授が服部浩之准教授のキュレーションのもと「Cosmo-Eggs｜宇宙の卵」展を開催します。

海底から運ばれた「津波石」を起点に

展覧会は下道氏が2015年に沖縄の八重山諸島で出会い、リサーチと撮影を続けている「津波石」が起点。大津波で海底から陸上にまで運ばれた巨石を「広場」あるいは「モニュメント」に例え、異なった表現手法をもつ作家が協働することで、多様な「共存のエコロジー」を探求するものです。タイトルの「Cosmo-Eggs｜宇宙の卵」は、世界は卵から誕生したという卵生神話に着想を得て、人間 / 非人間の共生や複数の神話 / 歴史の共存という主題を描きだします。私たちはこの地球上で、異なった多様な存在と異なったまま共存することがいかに可能かについて想像を巡らすプラットフォームとして、映像や音楽、ことばが混在し共鳴する展覧会が実現されます。

シンポジウムでは分野の異なる４人の作家がそれぞれの専門や活動について話し、キュレーションする服部准教授が「Cosmo-Eggs ｜ 宇宙の卵」の構想を語った

01　大森山アートプロジェクト

生命の本質を捉え、発見する

大森山動物園と秋田公立美術大学は、アートでの動物園活性化を目指して様々な連携に取り組んでいます。連携の始まりは、ベ・ジンソク准教授（コミュニケーションデザイン専攻）を中心とした 2012 年の Arts Street プロジェクト（動物園アクセス道路へのイラストボード設置）や 2013 年のイメージキャラクター・オモリンのデザイン制作などでした。2015 年 ～ 2017 年には動物園内でアート作品の展示やイベントを行う正式な連携事業「大森山 Arts & Zoo」へと発展しました。さらに、2018 年からは大森山公園や新屋地区 にも活動範囲を広げた「大森山アートプロジェクト」が新たにスタートしています。

アートプロジェクトでは、アートサインの制作・設置、動物や自然の不思議と魅力を学ぶワークショップ「Zoo de 工作」の工作キットなどを考案・制作。動物園のみならず、大森山公園一帯が学生たちの学びと発表の場となりました。この活動の中で、常にキーワードとされてきたのが「生命」です。

共に歩んできた小松守園長は、「グッズ制作の提案があった時には、動物園に新しい展開が生まれるかもしれないという予感があった」と話します。

「“生命” とは、モチーフ以上の存在であるはず。なぜこの

動物はこの形をしているのか、なぜこういう動きをするのかを考え、生命の本質を捉えて表現を模索していくのだと思います。学生たちは、生きること、誕生すること、死ぬとはどういうことかというところまで学んでくれた。プロジェクトによって、動物園は生き物だけの動物園ではなく、もっと楽しい場所に変容していく可能性をいただきました。かわいい、美しい、不思議という動物の生命に対する思いとアートは、実はとてもシンクロナイズしやすいものだという発見がありました」

そして小松園長はこのプロジェクトを、「小さな点から面になって、厚みが出て、大学と動物園両者がそれぞれに地域との接点を広げていくことができた事例」と評価します。

動物園から、まちづくりへ。10 年余り続いてきた学生と教員の取り組みは大森山公園一帯を取り込んで、より大きなプロジェクトへと広がっていきます。

02　かみこあにプロジェクト

村と学生・教員が企画・運営する
手づくりの芸術祭

秋田県の中央部に位置する上小阿仁村。その最奥地にある集落や廃校となった小学校などを舞台に、アートや音楽、伝統芸能などを繰り広げながら里山の魅力を発信する「かみこあにプロジェクト」では、準備作業や運営に教員や学生が関わってきました。プロジェクトは 2012 年、「大地の芸術祭越後妻有アート・トリエンナーレ」（新潟県）の飛び地開催としてスタート。2016 年からは上小阿仁村の住民が実行委員会を立ち上げ、大学も協力して手づくりの芸術祭として開催されてきました。

「実行委員長が同じ集落の人で。作家さんを案内してほしいと言われてキャンプ場に連れて行くようになりました。きれいな風景を見てもらいたくて」

そう話すのは村在住の田中定和さん。夏の「かみこあにプロジェクト」開催期間中、建築板金業が休みの日曜には萩形ダムのキャンプ場や川に案内。キャンプをしたり、川でウグイを獲ってご馳走するなどして滞在制作中の作家らをサポートしてきました。田中さんが案内する渓流や山間の風景は、上小阿仁村の奥深い部分まで捉えたい作家の刺激となり、そして田中さん自身にもある変化が。

「何も興味がなかったのですが、作家さんと交流するようになってからは日常生活の中で自分も絵を描くようになりました。描きたい風景があればスケッチブックを広げて、鉛筆やクレヨンで」

キャンプ場の風景や廃校した母校、巨木、まつりといった地元の風景を描くだけでなく、作家の制作現場を見に行ったり、展覧会に足を運んだりと生活はガラリと変わったといいます。作家や学生は田中さんをはじめとした村の方々と関わったことをきっかけに、昨年は地元の七夕どうろうを制作するなど交流を深めました。地域の方々との繋がりが、プロジェクトを支えています。

03 JR 秋田駅（ノーザンステーションゲート秋田）

©SATOSHI ASAKAWA

県産材を使って秋田の玄関口をデザイン

「地方創生に向けたコンパクトなまちづくり」を掲げ、JR秋田駅を中心として秋田県、秋田市、JR東日本が進めているプロジェクト「ノーザンステーションゲート秋田」。産学官のプロジェクトチームには小杉栄次郎教授（景観デザイン専攻）

をはじめとした秋田公立美術大学の教員や助手、学生たちが関わり、地域資源である秋田杉などの県産材を活用した新しい景観・公共空間づくりをJR秋田駅に展開しています。

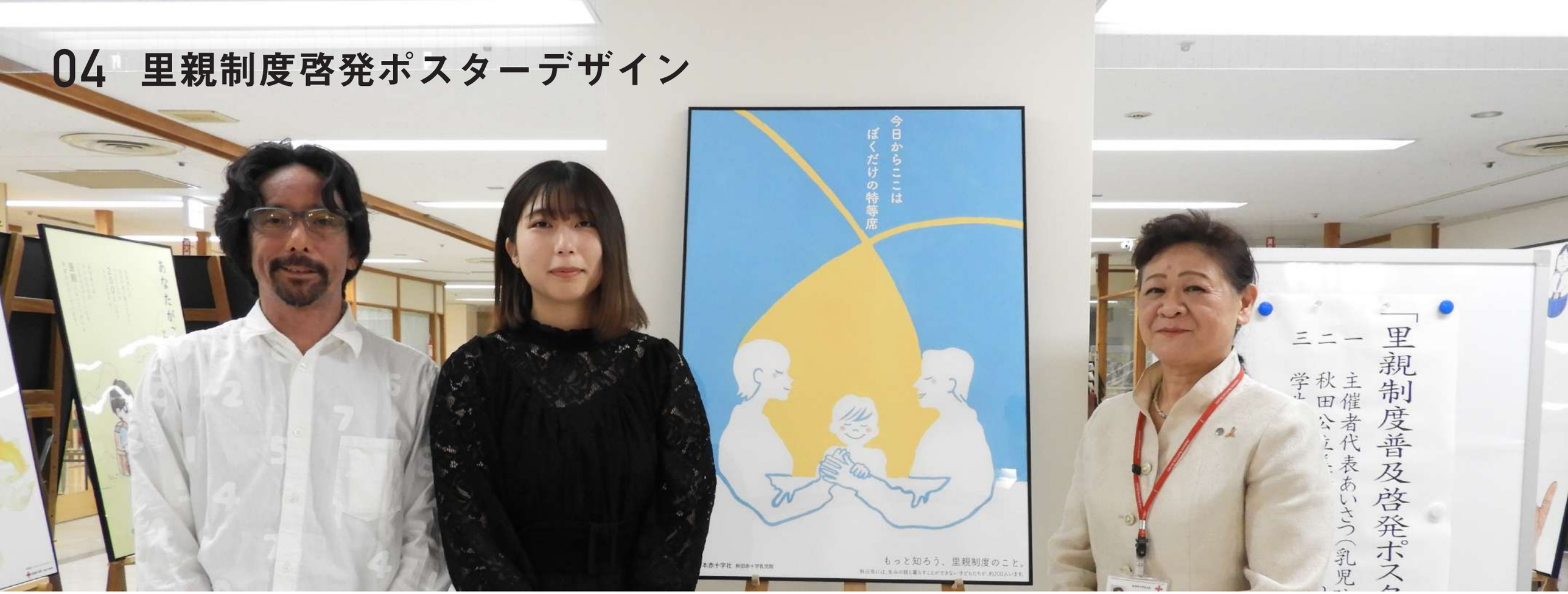
東西自由通路に全長80mを超える秋田杉の壁面や多種多様な県産木材を使った待合ラウンジをつくったプロジェクトは、「ウッドデザイン賞 2017」最優秀賞を受賞。工事中には助手と学生とでアートプログラム「エキマド」を展開して注目を集めました。2018年の「ウッドファースト推進イベント」には、景観デザイン専攻の学生と教員らが秋田杉合板で制作したマルチファニチャー「Slit-bench」が出現。秋田杉のやわらかさ、ぬくもりあふれる公共空間へと広がりを見せました。

JR東日本秋田支社企画室地域活性化推進室の田口義則室長は、「ノーザンステーションゲート秋田の取り組みによって、市民が秋田駅への評価を変えた」と話します。

「秋田駅が、単に列車に乗る、列車を待つ場所ではなく、利用する人とコミュニケーションをはかれるような場になった。特に木質化については、全国各地から視察に訪れる人が多く、注目度が高い。秋田杉のぬくもりは他にはない特徴となって、JRの駅の中でも自慢の駅になりました」

2018年4月にはJR東日本秋田支社と秋田公立美術大学とで包括連携協定を締結。駅を中心としたまちづくりや沿線の活性化、授業演習・共同研究、そして次世代の地域づくりを担う人材育成について協力することになりました。教員や学生のアイデアを旅行商品や駅弁の開発などにも生かすほか、インターンシップの受け入れやカリキュラムの一環としてデザイン提案などを実施。2018年秋に開催された駅まつりでは、ミニSLの乗車記念に学生が提案した木の切符を採用するなど様々な取り組みへと続いています。

04 里親制度啓発ポスターデザイン



秋田赤十字乳児院とともに
里親制度における現状と課題に向き合う

秋田赤十字乳児院（秋田市広面）は、いろいろな理由で保護者と暮らせない乳幼児が生活している秋田県内唯一の乳児院です。「質の高い養育」、「家庭支援」と「地域支援」の3つの機能を持ち、子どもの個別に合わせた養育や安心して暮らせる環境で発達できるように促す役割を担っています。2016年の改正児童福祉法では、家庭で生活できない子どもは「施設」ではなく「里親」のもとで生活するよう支援する方針が掲げられました。

「秋田県は、里親登録者数が少なくこのような子どもが施設で生活している割合が全国で最も高いのが現状です。当院では入所した子どもの約半数が家庭に戻ることができない結果となっています。子どもを託す里親への支援を強化するため、制度の普及啓発から委託推進、アフターケアまで里親と子どもたちを支援しています」

そう話す秋田赤十字乳児院の児童指導員・京極芳久さんは、

秋田県における最初の里親支援専門相談員でもあります。里親登録者が伸び悩む秋田において、普及啓発活動は重要課題でもありました。

「斬新なものを生み出す学生さんの力を使わせていただきながら普及啓発活動ができればと、協力を依頼しました。通常はまったく知らない存在である“里親”について考えてもらい、情熱を持った学生さんたちにポスターを作ってもらいました。我々にとっても、きっと学生さんにとってもいい学びの機会になったのではないかと思います」

「里親月間」のキャンペーンで使う里親制度普及啓発のためのポスター制作には、コミュニケーションデザイン専攻の学生が取り組みました。学生たちは秋田赤十字乳児院を訪問して乳児院の現状や制度について話をうかがって制作。乳児院関係者による審査の結果、採用された１作品は秋田県内でのキャンペーン事業で使用されました。また、美大サテライトセンターでは採用作品を含めたポスター展を開催。里親制度について知っていただくとともに、「子どもたちには今よりも笑顔が増えてほしい」と願う京極さんの思いを学生の手によって広げる機会となりました。

05 高校生クリエイティブキャンプ

「超おもしろい」合宿の企画公募事業がスタート！

日本全国の高校生を対象にした「超おもしろい」合宿企画を公募する「高校生クリエイティブキャンプ」。初年度のグランプリは、エクセラン高等学校（長野県松本市）の「七福神漬け NEO」に決定しました。

「高校生クリエイティブキャンプ」は、高校生ならではの視点で秋田の地域・文化資源を活かし、合宿を通じて日頃の活動を深めること、そして彼らが秋田を楽しむことを通じて同世代の若者に秋田の魅力を伝えようとするものです。秋田で実施するユニークな合宿プランを募集し、書類選考でまずは 3 団体を決定。各々が企画したプランに基づいて秋田県内で合宿した成果を映像資料にまとめ、日本を代表するクリエイターが審査しました。

2018 年に合宿した 3 団体は、秋田で 1,000 人にインタビューするという「レガロ工房」、里親普及率の低い秋田で普及促進のため子どもたちとロゴマークを作成する「子どもデザイン教室」、秋田での交流をもとに神輿を作り、お焚き上げする「七福神漬け NEO」。審査員を務めた藤浩志教授は、グランプリを受賞した「七福神漬け NEO」について、「合宿中に巡った様々な場、そこで集めたもので作られた神輿を最終日に担いで秋田市内を練り歩き、最終的に大学近くの神社でお炊き上げを行うというパフォーマンスは秀逸でした。それぞれの個性が際立つようなメンバーで、エネルギーの限界まで昇華させようとする態度がなんとも眩しく素晴らしかった」と評しています。

合宿中は秋美の学生が記録チームを結成し、高校生の熱い夏を追いかけました。学生たちは連日、写真や動画を撮影してウェブで公開、高校生が秋田を楽しむ様子を同時進行で伝えました。

http://u18cc.jp/

BIYONG POINT

実験的な展覧会やプロジェクトを公募！

秋田公立美術大学ギャラリー「BIYONG POINT（ビヨンポイント）」は、CNA 秋田ケーブルテレビと秋田公立美術大学が共同で運営するホワイトキューブギャラリーです。秋田ケーブルテレビ社屋内にオープンして以来、大学の研究・教育成果を県内外に向けて発信する拠点として教員・助手や招聘作家による個展を開催してきました。2018 年からはギャラリー運営を NPO 法人アーツセンターあきたが担当。実験的な展覧会やプログラムの企画を進めるとともに、多くの方により芸術に親しんでいただく機会としてのエデュケーション・プログラムも実践しています。

2019 年は、新たな芸術領域の創造を試みるギャラリーの特性を捉えた実験的な展覧会企画を全国公募。テーマ性、チャレンジ性、地域性、展開の可能性等を審査して、実験的な展覧会を実施していきます。小さなホワイトキューブから、新たな創造が始まっています。

AKIBI 複合芸術プラクティス「旅する地域考」

「旅」を通したリサーチやワークショップで「地域」を問い直す

岩井成昭教授（秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科）が展開する「旅する地域考」は、秋田公立美術大学に所属する教員をはじめ、国内外からユニークな講師を招いて実施するアートマネジメント人材育成事業です。前編では「表現者の視点を共有する」として、後編では「地域に還元する」として創造的な視点を活かした企画者、運営者、実践者を育成することを目的に、「旅」を通してリサーチやワークショップを実施しました。

バックグラウンドの異なる参加者が、「地域におけるアート」「アートにおける地域」のあり方について、旅人の自由な視点から思考を試みました。

秋田公立美術大学サテライトセンター

教員や学生、卒業生の研究報告・成果を発表

JR 秋田駅西口の商業施設・フォンテ AKITA の 6 階に位置する秋田公立美術大学サテライトセンターは、教員や助手、学生の研究・制作の成果発表の場であり、大学のサテライトとして広報の機能も担っています。ギャラリーでは美術やデザイン、ものづくり、建築、映像、プロジェクトなどさまざまな分野の取り組みや卒業生の活動を展覧会形式で発表。デッサンルームでは高校生の基礎力を高めるデッサンスクール、デッサン初心者から経験者まで自習スタイルで利用いただく中高生対象の素描 Lab（ラブ）を開催するなど子どもたちの学びの場、感性を育む場としても機能しています。2018 年には卒業生シリーズがスタート。第 1 弾として開催した菊地暁子個展「うつろ石うつつ」では、菊地が在学中からテーマのひとつとして描いてきた石をモチーフとした作品をはじめ、これまでの作家活動を紹介しました。

また、秋美初の試みとして、秋美の学生・研究生が展覧会形式で展示販売する「AKIBI ARTs MARKET」を開催。第 1 回目は絵画や立体、パズルなど学生自らが値札を付けた作品約 160 点が並び、多くの人で賑わいました。

卒業生シリーズ第 1 弾として開いた菊地暁子個展「うつろ石うつつ」

「秋田を探る」トークイベント

AKIBI ARTs MARKET

旧県立美術館再生ワークショップ

秋田市中心市街地における創造・交流・活動の拠点づくり

秋田市中心市街地の千秋公園入り口に位置する旧秋田県立美術館は、2020 年秋頃をめどに「秋田市文化創造交流館（仮称）」としてオープンする予定です。秋田公立美術大学と NPO 法人アーツセンターあきたは秋田市から委託を受け、旧県美再生に向けて利活用を話し合うワークショップ「せばなるあきた」を実施。芸術・文化・歴史をテーマとする創造・交流・活動の拠点の運営の仕方を運営管理計画としてまとめ、今後、新たな動きを展開していきます。ワークショップ「せばなるあきた」には秋美の学生も参加。準備からグラフィックレコーディングまで、ファシリテーターやコーディネーターを手伝いながらこれからのまちづくりに向けて動き出しました。

秋田公立美術大学
〒010-1632　秋田県秋田市新屋大川町 12-3
JR「秋田駅」から羽越本線「新屋駅」下車　徒歩 15 分
JR「秋田駅」から秋田中央交通バス・新屋線
「美術大学前」下車　徒歩 1 分
電話：018-888-8100（代表）
018-888-8105（学生募集・入試）
FAX：018-888-8101
E-mail：soumu@akibi.ac.jp（大学）
kyomu@akibi.ac.jp（学生募集・入試）

制作　NPO 法人アーツセンターあきた
デザイン　大島慶一郎
写真　高橋希、草彅裕、船橋陽馬
印刷・製本　秋田活版印刷株式会社

※乱丁・落丁誌はお取替えいたします。
※本誌内容の無断転記、転載、複写はご遠慮ください。
※本誌データは 2019 年 3 月末日現在の情報です。
あらかじめご了承ください。

秋田公立美術大学
AKITA UNIVERSITY OF ART

AUA
AKITA UNIVERSITY OF ART